# 福島の児童文学者 7

## 「岡田泰三・日下部梅子」

### 岡田泰三について

岡田泰三、大正から昭和にかけて活躍した童謡詩人。『日本童謡集』（一九二六年版・新潮社刊）、『赤い鳥童謡集』（昭和五年・ロゴス書院刊）、『日本童謡集』（昭和三十二年・岩波書店刊）、『赤い鳥傑作集』（昭和三十年・新潮社文庫）に掲載され、中央ではその名が知れ渡っていたが、地元会津で知る人は殆どいなかった。彼自身も、投書家に始終し一冊の童謡集も残してはいない。

泰三は、明治三十三年十二月二十五日、相馬郡太田村（現在の原町市）に生まれた。大正九年福島県師範学校を卒業後、大沼郡の新鶴第一尋常小学校の教師を振り出しに、耶麻郡松山尋常高等小学校長等を歴任。敗戦後は坂下町若宮中学校長を最後に退職し、昭和二十八年十一月二十三日、新鶴村で亡くなっている。五十三歳であった。

### 日下部梅子について

日下部梅子、大正から昭和にかけて活躍した童謡詩人。大正十二年に岡田泰三と結婚し、夫と共に童謡雑誌『赤い鳥』に投稿、数多くの入選を果たす。彼女自身も夫泰三同様、中央では知られていたが地元では知られず、作品集も残してはいない。

梅子は、明治三十四年七月十日、大沼郡新鶴村に生まれた。本名をウメノという。県立会津高等女学校、教員養成所を卒業後、大正十年大沼郡の新鶴第一小学校の教師となる。大正十二年岡田泰三と結婚し、大正十三年退職。大正十四年に長男を、昭和七年には次男を出産している。

昭和四十七年一月一日に七十一歳で亡くなっている。

### 童謡雑誌『赤い鳥』投稿時代

泰三は、童謡雑誌『赤い鳥』を創刊号から毎号二冊ずつ購入するほどの愛読者であった。その彼の作品が初めて入選したのは、大正十二年五月号に投稿した「氷滑り」と「並木の日暮れ」であった。その後も数多く入選しているが、代表作となったのは、昭和二年七月号に投稿した「丘のはたけ」であり、これにより一躍注目されることとなった。

その後この作品は、昭和六年作曲家藤井清水により曲が付けられ、昭和五十九年十一月に、東京・新宿のモーツァルトサロンで行われた、児童文学者藤田圭雄の出版記念会で演奏されている。

梅子も、大正十四年二月号に「霜の夜明け」を初めて投稿し佳作となり、それ以後も数多く入選している。

昭和三年、北原白秋が『赤い鳥』童謡欄の優れた投稿者を選んで結成した、「赤い鳥童謡会」の会員に二人は選ばれ、『赤い鳥童謡集』の刊行準備に参加している。

### 『赤い鳥』休刊ののちは

昭和四年に『赤い鳥』は休刊となった。『赤い鳥童謡集』が昭和五年に刊行された後に、泰三・梅子夫妻は、更に新しい童謡を創造しようと志向する会員らと共に、童謡同人誌『チチノキ』を同年に創刊する。

泰三は、創刊（三月）号に「いつだか」、四月号に「お日和」、五月号に「霜の朝」「いつ頃」、七月号に「浜辺」「芽」、十二月号に「川原で」を掲載しているが、昭和七年二月号に「雨あがり」「ひよこ」「ご本」を掲載以後、作品の発表は見られない。

梅子もまた、創刊（三月）号に「夜中」、四月号に「おめがねで」、五月号に「お馬をひいて」「あの夢」、七月号に「母さまは」「風は」を掲載しているが、昭和六年七月号に「初夏の夜明けに」、十二月号に「不思議」以後、作品は見られない。

更に、昭和七年の五月号の住所録には岡田・日下部共にその名が見られるが、昭和十年五月号（第十九冊最終号）の住所録からは消えている。

### 岡田・日下部の功績

岡田泰三、童謡雑誌『赤い鳥』に投稿し、推奨八点、佳作九点、入選十四点の作品を持つ。日下部梅子においては、佳作六点、入選三十一点にも及ぶ業績を持ちながら、『赤い鳥』研究書には、この夫妻についての紹介は作品のみである。

平成四年六月に、『岡田泰三・日下部梅子童謡集』が、教え子の田代重雄氏により出版された。これが夫妻初めての作品集である。この機会に、素晴らしい作品と共に、岡田泰三・日下部梅子夫妻についても知って欲しい。

### 参考文献

赤い鳥研究（小峰書店）
日本童謡史（あかね書房）
岡田泰三・日下部梅子童謡集

（会津童詩会）